土木建築 工事基本知識講座

昭和2年　第10編の1

コンクリートに關する誌上講演

鐵筋混凝土の耐震價値と施工法

工學博士　阿　部　美　樹　志

1

昨年十一月に急に外國へ立ちまして、今年の四月二十四日に歸りました。此の間僅かに百六十日に過ぎませぬ、洵に短期間でございました。

目的は

特殊の事を少し自分の職務から離れて調べて見たいと思いまして參りましたので、彼地に於きましては、主に工學研究所に居りましたが爲に、各地を旅行する機會は甚だ少なかつたのでございます。昨年十二月三日シアトル市着、同六日イリノイ大學工學實驗所に到着研究に從事し、二月の末に米國を立ちまして、四月の初めに歐州から再び米國に歸つたやうな次第でありまして、歐羅巴の方が一ヶ月餘り米國の方が三ヶ月餘と云ふことになります。

其の參ります目的は、色々ございましたが主なる事と致しましては、此
鐵筋混凝土構造物の根本的耐震價値と云ふことに歸着致します。

是は大きな問題でありまして、僅か半年や一年では解決の出來ないことで、此事は本誌の讀者も御承知のことでございます。第一に先づ實驗から出發して、更に將來の研究を進めて見たいと云ふ端緒に過ぎないのであります。從つて是れからが寧ろ忙はしい時にならうと思つて居ります。

建築或は土木に從事して居られる讀者が、御承知の如く日本のやうに地震國では、
建造物を柔にすべきか、
剛にすべきか、
是は根本的の問題でありまして、柔と云ふ事にも相當の根據があり、剛と云ふことにも相當の根據があらうと思ひます。

併しそれは、さう云ふ學術的根據に據るか或は實驗的根據に基くかと申しますれば、遺憾ながら私共は其 Basic Assumptiou に就て確實なるデータを見出し得ないのでございます。

此**ベーシツク、アツサンプシヨン**が果して正當であるや否や、此事なしに無暗に進むと云ふことは、材料も不經濟でありませう。或場合には不安も伴ひませう、

何とか、此問題を幾らかでも根本的に確信を得るやうにしたい、自分の考へる所では此點から出發して見たいと思ふのでございます例へば建築物は、剛でなければならぬと曰ふ事、是は實用上の見地から尤な次第でございますが、理窟から申しますと柔でなければならぬと云ふ事が勝つかも知れません、